



海外レポート

「フランス・バロック・オペラ」プロジェクトに 参加して

濱田あや

開催期間：2016年7月16日～24日 9日間

開催地：ロワイヨモン修道院（フランス、イル＝ド＝フランス地域圏）

指導教授：クリストフ・ルセ（チェンバロ奏者、「レ・タラン・リリク」

音楽監督）

リタ・ダムス（声楽家、ハーベ王立音楽院教授）

ステファーヌ・フェュジェ（ヴォーカル・コーチ、パリ地方音楽院教授）

ナタリー・ヴァン・パリス（バロック舞踏家・振付家）

演目：ジャン＝バティスト・リュリ（1632-1687）『アルミード』（1686）

およびジャン＝フィリップ・ラモー（1683-1764）『イポリートとアリシ－』（1733）

「ロワイヨモン財団」は、芸術および文化事業を支援しているプライベート団体で、パリ北方30キロに位置する、ロワイヨモン修道院（歴史建造物）に設立されています。活動の一環として、同修道院にて音楽や舞踏公演のシリーズを開催しているほか、年間約20種類の音楽講習会（声楽、鍵盤楽器、作曲など）を主催しています。今回参加したプロジェクトは、チェンバロ奏者／指揮者のクリストフ・ルセ氏が中心となり、「フランス・バロック・オペラ」をテーマに構想されたものです。リュリの『アルミード』とラモーの『イポリートとアリシ－』という抒情悲劇2作品を、チェンバロ伴奏のコンサート形式によって上演することが企画され、7月中旬に9日間の集中講習がおこなわれました。

私は、クリストフ・ルセ氏と、ロワイヨモン財団の声楽プログラム・ディレクターであるエドゥアール・フレ・コール＝フーティ氏から直接お話をいただき、ルセ氏のクラスとコンサートでの通奏低音／伴奏を担当するチェンバロ要員として加わりました。ルセ氏には、6年ほど前よりチ



ンバロの講習会などでレッスンを見てもらっていましたが、オペラなど他の分野でかかわらせていただくのははじめてです。フランス・オペラのスペシャリストであるマエストロは、歌手にどのような指示を出して、作品を仕上げていくのだろう……と、ひじょうに楽しみにはしていましたが、その期待をはるかに上回る、素晴らしい経験となりました。

受講の申し込みは、2016年3月に締め切られ、350人の歌手、30人のチェンバロ奏者の応募がありました。書類審査の後、5月初旬にパリでオーディションがおこなわれ、16人の歌手（フランス人12人、ベルギー人2人、スペイン1人、オーストラリア人1人）と2人のチェンバリスト（パリ国立高等音楽院卒のフランス人と、エリザベート王妃音楽院の講師を務めているベルギー人）が選出されました。

ロワイヨモン財団が、講習会受講料、敷地内の宿泊施設での滞在費、1日3食の食事代を負担してくれますので、受講者は登録費（150ユーロ）、ロワイヨモン友の会会費（15ユーロ）、フランソワ・ラング図書館使用料（12ユーロ）などを支払うのみです。ワークショップ開催中は、森の中にある広大な敷地から一歩も外に出る必要もなく、素晴らしい環境の中で、思う存分音楽に専念することができます。宿泊所はホテル形式（各室シャワー・トイレ付）になっていて、毎日ハウスキーピングが入り快適です。食事は食堂でのビュッフェ形式で、毎食時に前菜、主菜、パン、チーズ、デザート、ワインが種類豊富にずらりと並びます。三食の食事の時間は決まっていますが、御三時も用意されますし、コーヒーマシンは24時間使用可能です。楽器は、ローラン・スマニヤック製作のチェンバロ2台と、ディヴィッド・ジャック・ウェイ&マルク・デュコルネ製作のもの1台の計3台（ピッチ：A = 392Hz、音律：ミントーン）が、ワークショップ開始前に搬入されました。

一日の大まかなスケジュールは、以下のとおりです。

午前8時半 - 9時半	朝食
午前9時半	チェンバロ調律
午前10時 - 午後1時	マスタークラス
午後1時 - 午後2時	昼食
午後2時 - 午後7時	マスタークラス
午後7時 - 午後8時45分	ヨガ
午後8時45分 -	夕食
午後10時頃 -	(必要に応じて) 歌手との合わせ

期間中毎日、午前10時から午後1時、お昼休みを挟んで、午後の部は2時から7時までと、一日8時間のセッションがおこなわれました。(チェンバロ奏者は毎朝「調律」の任務もあります)。ルセ氏のクラスの他、ステファーヌ・フェジェ氏(ヴォーカル・コーチ)、リタ・ダム女史(声楽家)のクラスが、同時進行でおこなわれており、両クラスにもチェンバロ奏者がひとりづつ付きます。今回は、フランス語圏の人が圧倒的多数のため、クラスはフランス語で進行してきました。また、丸一日は、ナタリー・ヴァン・パリス氏による、バロック・ダンスの振り付けのセッションに充てられ、約7時間にわたってバロック・ダンスやバロック・ジェスチャーの指導を受けました。

私は、フランス・オペラの通奏低音の経験はいままであったのですが、両作品とも、全幕を演奏するのははじめてです。リュリの『アルミード』はファクシミリ版、ラモーの『イポリートとアリシー』はベーレンライター社ラモー全集を使用しました。プロジェクトが始まる前に、伴奏パートの譜読みや、また、口が慣れるまで歌詞を何度も音読して意味を理解し、通奏低音を弾きながらリズム読みができるようにと準備をしておきました。それでも、『イポリートとアリシー』は3つの異なる版(1733、1742、1757)があることもあり、セッション中にスコアを見て初見でどんどん弾いていく事態も多くありました。歌詞を瞬時に理解して、場面や心情に即した表現で通奏低音を弾いていくことが求められます。異なる音部記号(フレンチヴィオリン記号やソプラノ記号)が入り交ざっているうえに、拍子記号も頻繁に変化していくので、弾きこなすのはなかなか一苦労でした。

ルセ氏のクラスは、独唱と重唱のレパートリーを中心に、1シーンごとに約1時間かけて進められています。そのなかでルセ氏は、朗誦法、当時の発音、歌詞の理解、フレージング、装飾法、バロック・ジェスチャー、演技など多岐の分野にわたって、歌手をコーチングしていきます。そういった歌手への指導内容は、通奏低音奏法だけではなく、チェンバロ独奏でフランス音楽を演奏するさいにも、重要な手掛かりとなることばかりです。言葉の抑揚にあわせたイネガルの演奏方法や、母音の長短や音節のアクセントを意識したフレーズ作り、レシタティフでの間{ま}の取り方は、そのまま器楽作品の演奏に応用できますし、ジェスチャーやダンスの身体表現を取り入れて考えると、劇的な表現へのイメージがいっそう湧いてきます。装飾技法にかんしては、ベニーニュ・ド・バシイ(1621-1690)、ミシェル・ピニョレ・ド・モンテクレール(1667-1737)、ジャン=アントワーヌ・ペラール(1710-1772)による文献を踏まえながら、ルセ氏が装飾を加えていくのですが、良いセンスにあふれた装飾をほどこしていく過程はとても参考になりました。「きちんと模範を見せられるようにならないといけないよ」と、モンテクレール著『音楽の原理』[1736]に列挙された装飾音の奏法例を、歌手に交じって私も順番に歌わされ、たいへんな思いもありましたが……)。

また折に触れて、「この言葉にもっとふさわしい表現方法があるのでない?」「このシーンを表すには、違うタッチにしてみたら?」と、思いが



けなく、チェンバロ・パートにかんしても助言をしてくださり、とてもうれしくありがたいござりました。「ここは低音域の音を重ねて響きをふくらませると効果的」「アルペジオの入れ方や和音のリリースの仕方が単一的にならないように」「ルイ・クープランやダンブルベールのノン・ムジュレでの動き方をここで発揮して」「この場面は音や装飾を増やして、もっとドラマティックな展開に」「ここは低音が書かれていませんけど、右手で少し流れを付け加えるといいのでは」などと、表現方法を多彩にしていく術を弾きながら説明してくださいました。また、私の質問や疑問点にも、「ああ、それは僕も長年考えていたことなのだけれど……」と言しながらも、数々の例を挙げながらいつもていねいに答えてくださいました。常にセンスの良い通奏低音奏法を自身で模索しながらも、実際に仕事の場で、指揮者からアドバイスを賜る機会はそう滅多にはないので、今回ルセ氏に親しく教えを乞うことができ、たいへん恵まれた環境下にあったと実感しています。ご本人も、「たしかにこういうことは、説明するのが難しいし、教示してくれる人はなかなかいないだろうね……でも、チェンバロ奏者にとってオペラのレパートリーを的確に理解することは、表現の幅が広がるし、ひじょうに大切なことだから」と親身になって向き合ってくださいました。毎回、とても有意義な時間となりました。(真面目一色のセッションのようですが、歌手の来ないちょっとした隙間時間を見つけては、バッハやクープランのソロ曲を弾き合ったり、覚えたてのバロック・ダンスのステップを復習し合ったりしながら、和やかにセッションをこなしていました)。

一日中弾き続けていて、これだけでじゅうぶんに、一息つく暇もないほど濃密なスケジュールなのですが、加えて午後7時からは、中庭でヨガのクラスもおこなわれました。参加は任意でしたが、ルセ氏も含め大多数人が毎回参加。シヴァナンダヨガの呼吸法や基本のポーズを実践し、最終日には全員で「ヘッド・スタンド(頭立ちのポーズ)」をこなすくらいまで進歩を遂げました(!)。音楽に没頭するかたわら、このように縁に囲まれて心を落ち着かせるひとときがあり、また、その後の夕食時には、皆でテーブルを囲み、美味しい食事とワインとともに、話に花を咲かせて楽しく過ごし、本当にぜいたくで理想的な毎日を送ることができました。

ロワイヨモン修道院では、今回のような、チェンバロ奏者も参加する声楽プログラムは毎年企画されていて、2014年はルネ・ヤーコプス氏主

宰のもと、モンテヴェルディのオペラ『オルフェオ』および『ポッペーアの戴冠』、昨年はモーツァルトの『フィガロの結婚』の集中講習がおこなわれました(来年度はポール・アグニュー氏による、パーセルとデマレの作品演奏が予定されています)。その他、ラファエル・ピション氏による「バッハのカンタータ」の講習会も開催されています。鍵盤楽器部門では、チェンバロのソロ作品に絞ったプログラムもあり、昨年はピエール・アンタイ氏が「D.スカルラッティのソナタ」を、今夏にはベルトラン・キュイエ氏が「ヴァージナル音楽」をテーマに、4-5日間のマスタークラスをおこなっています。毎回10人程度のチェンバロ奏者が対象で、個人レッスンやテーマに関連した講義がおこなわれます。

ロワイヨモン修道院へは、パリ=シャルル・ド・ゴール国際空港から路線バスでアクセスできますし、最寄り駅「ヴィアルム」へは、パリ北駅からフランス国鉄の各停電車で45分です。

私は、ルセ氏やパリ在住の歌手と一緒に、講習会初日の早朝にパリから電車で現地入りして、最終日の夜遅くにパリに戻りましたが、遠方からの参加者は同地での前泊や延泊が可能な場合もあるそうです(応相談)。

スタッフの方々は英語も話されますので、ロワイヨモンでの講習会にご興味のある方は、ぜひ、ロワイヨモン財団のウェブサイト(<https://www.royumont.com> 英語・仏語)より、「Professional Training Courses / Les Formations Professionnelles」のページをご覧になってください。

2016年8月



クリストフ・ルセ氏(左)と、ロワイヨモン財団・声楽プログラムのアーティスティック・ディレクター、エドゥアール・フレ・コール=フーティ氏(右)とともに。
このおふたりが今回の素晴らしいプロジェクトを企画。2年間の準備期間を経て実現しました。